



Executive Interview

エグゼクティブ
インタビュー

no.55

このコーナーは神奈川トヨタのお客様である経営者の方にお話を伺うコーナーです。

堂本製菓株式会社 四代目 代表取締役

堂本 典子 様

明治42年に起業した堂本製菓は、今年で108年目を迎えた老舗せんべい屋さんです。伝統を受け継ぎ、10年ほど前から四代目を務めるのは堂本典子氏。家業を受け継ぐ責任や苦難を語っていただきました。

■大きな試練の後に恵まれた幸運に感謝。

——先代はどんな方でしたか？

三代目の父・清一は27歳で社長となり、50年以上実務に携わっていました。下に4人の弟と1人の妹がいる長男として、家族の面倒を見なければならぬという気持ちが強い人だったと思います。私は25歳頃から本格的に手伝うようになっていましたが、父は長女の私に厳しく、妹には甘かったかもしれません(笑)。職人堅気で、口よりも背中中教えるタイプ。私も似た部分があります。

——代替わりの経緯を教えてください。

2006年に父が他界したのですが、生前「後継者は皆が決めることだ」と言っていました。父の妹である叔母が、私に「社長をやるよね？」と尋ねたので、深く考えずに返事をしたところ、共に堂本製菓で働いていた叔父たちに「異議はないよね？」と確認を取ってくれました。けれど

も先行きがどうなるのか、経営とは何か、全く見えていない状態でした。

——就任から2年後の2008年にはリーマンショックが起きましたね。

最初は「せんべい屋には関係ないのでは？」と、思っていたのですが、徐々に厳しくなり始め、年金受給対象となるベテラン従業員に辞めていただかねばならなくなりました。私は事務所で父に怒られたり、悩みごとがあると、そのベテランのおばさんたちに混じって袋詰め作業を手伝いながら、気分転換をさせてもらっていましたし、長いこと会社を助けてくれた人たちでしたので、とても辛い決断でした。でも、それ以降も変わらず気軽に「のんちゃん」と声をかけてくれたり……皆さんの優しさが身にしみました。

——さらに2012年に大きな試練に襲われたとか。

火事に遭い、工場の1/3が焼けました。

築50年は経っていた建物だったので原因がはっきりしていないのですが、稼働前の早朝だったので、けが人が出なかったのが幸いです。この時も人の優しさに救われました。出火を聞き、心配して集まってくれた従業員は、消火作業が終わるまで残ってくれ、総出で後片付けをしてくれました。お客様からは「小さい頃からおやつで食べているから、頑張っ続けてね」とお見舞いを頂戴したり。川崎フロンターレのサポーターの皆さんからも義援金をいただきました。全国レベルでスノーボードに打ち込んでいた長男も、連絡を受けてすぐ駆けつけてくれ、「また何かあったら心配だから」と、それから何か月も事務所で寝泊まりし、徐々に仕事を手伝ってくれるようになりました。

——息子さんが加わって変わったことは？

それまで卸売り中心だったのですが、工場横に店舗を構え、本格的に小売を始めました。叔父や叔母が分けて持って



長年積み重ねてきた人との絆。 伝統に新しさを加え、次世代へ繋ぐ。

いた会社の株も一つに取りまとめ、さらに会社のイメージを集約して包装紙などのデザインを統一しました。前々からやったほうがいいと勧められていたことなのですが、「お金がかかるのでは？」となかなか決断できませんでした。しかし、息子が紹介されたデザイン事務所に赴いたら、話が一気に進んでしまっただけで、お金も出せるような時期になっていたのが幸いしました。

■テレビの取材が大きな転機

——さらに大きな転機があったそうですね。

歌舞伎役者の市川染五郎さんが、TBSのテレビ番組『はなまるマーケット』で「おめざ」として揚げせんを海苔で巻いた当社の「大師巻」を紹介してくださったのです。さらに2013年度の総集編にも取り上げていただき、翌年の密着取材では、染五郎さんのお年賀に使っていただいていることがテレビで紹介され、全国から注文が殺到しました。でもちょうど、息子が通販サイトの使い勝手を向上させてくれたタイミングだったので、お客さまをお待たせしてしまいましたが多くのご注文も大きなご迷惑をおかけすることなく、配送ができました。



——テレビでの紹介はさらなる縁も呼んだとか。

百貨店の催事イベントに呼んでいただけるようになりました。勝手によくわからなかったのですが、名古屋の名鉄百貨店の担当の方が「旅行気分で」と誘ってくださったのを皮切りに、1年間、息子が担当してくれました。催事をきっかけに味を知ってくださったお客様が川崎に来てくださったり、縁が広がっています。

——五代目へ向けての継承も順調のようですね。

次女も事務を手伝ってくれて、なんでも引き受けて来てしまう私の欠点を息子と2人で補ってくれています。長女は結婚してスリランカに行ってしまったので、つながりを持ち続けたくて、カレー味のせんべいの味付けを本格派のガラムマサラ使用に切り替えました。

——パッケージ等で使われている「堂本」の文字は社長のお母様の筆と聞きました。

「大師巻」は私の父が作り出したものなので、それを包むものには母の書で夫婦のつながりを残したいという、私の息子からの提案でした。明治42年創業ということは、あまり意識していなかったのですが、初代・六左衛門から続く歴史は新しく生み出すことのできないものだと気づきました。六左衛門の「六」や川崎の「川」を図案化して使うことで、伝統やお得意様への感謝の気持ちを、常に

堂本製菓株式会社

〒210-0021 神奈川県川崎市川崎区元木1-2-4
TEL: 044-222-2454 FAX: 044-222-2716
HP: <http://www.doumoto.co.jp/>



次代を担うことになる長男の正也さんと共に。

目にすることができるようになりました。私の信条である「感謝」の文字も自分で書いたものが使われていて、目にするたびに初心にかえる気がします。思いを伝え合うのは大切。今まで、父同様に思いを口にするのが下手でしたが、これからは言葉で表現することも大事にしていこうと思っています。

毎月第2・第4土曜日は特売日

工場直売店へご来店の方限定で

全商品**1割引**で

販売しています。

※堂本製菓製造商品以外は除く。

毎回大行列となる盛況ぶりです。

<インタビューを終えて>

大きな苦難を乗り越えて来た堂本製菓は、味はもちろん、四代目の女社長の力強さと情の深さで、川崎のみなさんに愛されています。次代を担うことになる息子の正也さんは「川崎は人口が多く、人との繋がりが深い」と。それを証明するように、掛紙には「堂本製菓を日本一にしたい」という支援者・斎藤文夫氏が所有する歌川広重の浮世絵『東海道五十三次/川崎 六郷の渡し舟』が提供されています。